

## ぬれた本

内田 賢徳

黒いシミがつき、形の崩れてしまった本一冊をまだ捨てられないでいる。萬葉集のテキストで、大学生になってまもなく買った版である。ざっと四十年前に買ったこの本が傷んだのは、一九七一年に、住んでいた下宿が火災に遭った折である。類火であったが、私の部屋は半焼、本棚の本は、外側だけが燃えたところで、消火の放水を浴びたと見えてじっとりと濡れ、乾かしはしても、大半はもはや本の形を成さず、ただ焦げ臭い紙の固まりに過ぎなかった。それでも拾い上げた本も、その後買い替えて捨てたり、押入に入れたなりにしたり、これでも好かったらといっそ学生に遣ったりして、現在書架にあるのはこの萬葉集のみである。普及しているテキストであり、同じものを何冊ももっているから、それこそ捨ててもよい筆頭だが、なぜか残っている。初学びの思い出という気恥ずかしいが、そんなはっきりした理由などなく、何となく置いてあるというのが実態であろうか。

ぬれた本のこの体験が、この度の図書館冠水の報に接した時に思い出された。そして、職員の方々始め諸兄姉の献身的な活動と進歩した科学技術の恩恵で、十全ではないにしても、かなりの程度の修復が可能と聞いて少し安堵した。ただし、皺、反りといった変形の残る図書にこれから出会うこともあろう。そして被災の記憶は消えない。

およそ天下の孤本といった貴重なものでない限り、傷みの激しいものは廃棄すべしという意見は、もともとあり、これを機会に強くなるように思われる。限られたスペースを有効にという、それ自体正しい方針と整合するようでありながら、この合理主義には危うい陥穽がある。実はこの度の被災は、被害とは裏腹にそれを考えさせてくれる好い機会でもあった。資料の価値はその都度その都度に判定される。それに合うもののみを所蔵するというのは、無駄をなくすという効用はあるが、長い時間で考えた場合、特に価値観が変わることを考慮すれば、あまり賢いこととは言えない。以前に次のような経験をした。和辻哲郎の『古寺巡礼』は、日本古代の研究に大きな影響を与えた著作だが、現在手に入るのは昭和二十三年改版のものであって、大正八年の初版とは少しく内容と文章が異なっている。そのある一節「『古事記』の歌もこの像（中宮寺観音菩薩像をさす）よりさほど古くはない」が、古事記や日本書紀の歌を古代歌謡

として規定した大正九年の『日本古代文化』より以前に本当に記されていたかどうかを確かめる必要が生じた。古事記の研究史を調べていた時である。しかし、『古寺巡礼』初版は容易に見ることが出来なかった。図書館のカードに登録されていたものの大半は既に廃棄されていたり、紛失したりしていた。捜しに捜した挙げ句、京都大学にはたった一冊残っているだけということが分かった。果たしてその一文は初版にも記されていて、和辻はその時点ですでに古事記の歌について、中宮寺観音菩薩像から感受するものと同質のものを感じ取っていたことが分かった。今日の古事記の歌についての基本概念が成立するその時である。改版が出たり、そして全集が出版されたりということで、所蔵する価値と必要は減ったかも知れない。しかし、必要はそうした言わば量的な判断で尽くすことの出来ない側面も持っている。この場合、同じものはあるし、傷んだから廃棄するという処置は、本当は正しくなかったことになる。形が崩れても、修繕して残しておくべき資料であった。図書館の蔵書というのは、どこか無駄を承知と腹を括ることが必要なものであろう。

害を被ったのは図書だけではない。大型の教室用の地図が多くぬれていた。これらは、それを使う教育が終われば不用となる。しかし、廃棄されはしなかった。

今日不用品はあちこちに溢れている。製品が一つの用途のためのものとして作られ、用をなさなくなると捨てられる。そのサイクルを繰り返すことが、言わば美德として、使い捨ての後ろめたさを贖う。時折用を終えたことが、かえて価値を成立させることがあり、それは骨董と称され、その目利きに敬意が払われる。

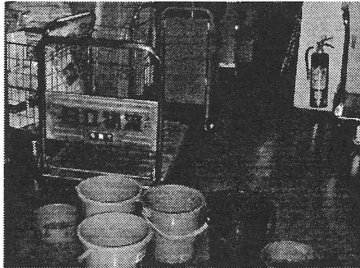
用いられなくなった地図が仕舞われていたのは何故か。それは骨董や古書としていつか値が出る日を待つためでも、或いは勘定は抜きにして、やがて訪れる懐古という甘やかな情の料に供しようというのでもない。もとより捨て場所に困って一隅を借りていたのでもない。こういうものを使っていたという記録として、記念に置いてあったというのは、かなりの人を満足させる答かも知れない。現にそれが仕舞っておくことの動機であってもよい。しかし、冠水したものを一望した時に、被害にも拘わらず私たちが経験した一種の感動は、単に記念品を見たことでも、また珍しいものを目にした満足でもなかった。地図の歴史においてこれらが重要であるかどうか、私には判断できない。それに興味が湧いたのでもない。何か私たちが古く否定し、忘れ去ってしまっていた、想像のあり方に関することと言えば抽象的になるが、古生物学についての図も含

めて、ここに蔵されていたのは、博物誌的な視線という一つの態度であったのではないのか。図書館は博物館でもあった。学術の細分化は、その視線を大雑把として顧みなくなっている。古色蒼然たる教養主義と一蹴する前に、そのトータリティに相当するような何かを私たちはもっているのだろうかと問うてみる必要がある。その反省のきっかけとしての感動であったように思う。環境とか総合とか私たちは言葉巧みに語って、その前史として書庫に眠っていたこれらに気づくことはなかった。効率という側面からは無駄であった所蔵が私たちに覚醒させるのなら、災いは転じて福となる。そのことを覚えていたい。

黒いシミがつき、形の崩れてしまった萬葉集が、また捨てられなくなった。

(うちだ まさのり, 人間・環境学研究科・総合人間学部図書委員長)

## Photo Album 2



亀裂から水がしたたる地下書庫  
通路へ落ちるしずくは、バケツ等でうけた